九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

「時」の視点からみる Jude the Obscure

石井, 有希子
九州大学大学院文学研究科 : 修士課程

https://doi.org/10.15017/6786962

出版情報：九大英文学. 33, pp.99-122, 1990-12-01. The Society of English Literature and Linguistics, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

「時」の視点からみる *Jude the Obscure*

石井有希子

序

'Done because we are too menny.' (多すぎるので　殺りました) (266)[1]。この言葉を残して少年リトル　ファーザータイムは、幼い弟妹を絞め殺し、自らの命をも絶つ。彼の酷い死は、間接的にスー (Sue) の未だ生まれぬ嬰児の生命をも断ち切ることになる。子孫の絶滅によってジュード (Jude) とスーの「未来」、「現在」から果てしなく前へと延びてゆく「未来」は断ち切られることになった。'Done because we are too menny.' ―僅か一行の、あまりにも世紀末的なこの書き置きは、*Jude the Obscure* を、一気に救いのないカタストロフィへと追い込んだと言える。無機質なこの言葉は、全てに終止符を打つ虚無の暗闇に向かう言葉だったのである。

この作品は、自らを、過去を語る年代記作者だと名乗る語り手によって物語られている。この作品に、我々はハーディの「時」に対する意識を大きく垣間見ることができる。何故なら、年代記作者に語らせることで、ハーディはこの物語を、少なくとも「歴史」という大きな「時」の流れの中で捉えていることが理解できるからである。そこに描かれている「時」とは、太古から脈々と波うつ、歴史という名の時間の流れであり、偶然 (coincidence, chance) となって表れる "Immanent Will" 的な、運命としての「時」であり、人間が内面的に、記憶、意識、無意識の中に持つ時間である。

この作品に於いてそうしたハーディの「時」に対する意識を極端な形で具現化したのが Little Father Time ―小さな時の翁―という奇妙な呼び名を持つ少年である。Father Timeとは「時」を司る「時の化身」としてエリザ

ベス朝以前から知られる一種のイコン（icon）であるが[2]、登場わずか一章余りで作品に転機をもたらし、急速にカタストロフィへと追い込んだ、この意味深な呼び名の少年が果たす役割は筋の上でも要（かなめ）をなしている。語り手は、少年が死んで初めて彼を、「小さなジュード（Little Jude）」と呼ぶ。彼は死んで初めて人間の少年に戻れたのである。命ある間、彼は「時の化身」「時の使者」または Father Time という名の意味する何らかの役を負い、果たし終えてその舞台から降りたといえる。

この小論では、「少年の存在が作為的にすぎる」という批判が多いなか[3]、ハーディが敢えて小説のリアリティを犠牲にしてまでも生み出した Little Father Time の意味するものを考察してみたい。これまで、この作品は主にヴィクトリア朝という社会の面から、フェミニズムの視点から、精神分析学の視点から議論されてきた。しかし、Little Father Time は、常にそうした議論の中では置き去りにされている。「人間ではない」少年 Little Father Time を、リアリスティックな視点からのみでは捉えることはできないからである。そこで今回は、逆に Little Father Time に光を当てることを透して、この作品を読んでいきたいと思う。

彼によって明らかにされるもののひとつは、彼の呼び名が示す如く、この小説の持つ「時間性」である。それは、時の化身、Father Time が持つ一般的機能を意味するだけに止まらない。少年 Little Father Time の根源的性質が持つ時間性、そして彼の「登場」と「退場」に表れるような、彼がこの作品の中で構造的に持つ時間性が、この小説全体が持つ時間性の基調を為していると思われるのだ。つまり、僅か一章余りしか登場しなかったこの少年が、*Jude the Obscure* の性質と構造が持つ時間性を、シンボリカルに凝縮していると思われるのである。

たとえば、この物語には、着々と刻まれ一直線に進み続ける時間の世界で、「過去」がふっと「現在」を押しやってしまうほど大きく蘇り、脅かす瞬間、—「過去」が回帰する瞬間がある。それは、換言すれば、直線的時間と円環的時間の交わる瞬間とも言える。直線的時間と円環的時間の交わり—それはこの物語の中で、常に何らかの変化をもたらす。そして、それがこの作品の持つ時間性のひとつとなっている。その時間性は、回帰しながらも、尚、直

線的に進み続けるギリシア悲劇の永遠性に繋がる性質を持つようにも思える。しかし、この作品にはギリシア悲劇のクライマックスの後に訪れる浄化、回復、再生は無く、ただひたすら不透明で、不毛な終末へ向かう。つまり、それは、回帰しながら直線的に進み、最後には回帰をも止めて、一直線に終末へ向かって進み続けるという時間性である。そうした時間性を、Little Father Time が、その構造の面で持っていると思われる。しかも、それは、ハーディ独特の哲学をも反映していると言えるであろう。そこで、これから、Little Father Time によって明らかにされる、このような時間性に留意しながら、主人公たちの生き方、また、中心舞台である、回帰される空間クライストミンスターを、「時」のフィルターを透して探ってみたい。

I. Little Father Time

Little Father Time—小さな時の翁—この奇妙な呼び名を持つ少年は、少年らしい性質を悉く剝ぎ取られ、常に時代の暗い先—終末—を見ているかのような人物として描かれる。この「小さな時の翁」による弟妹の殺害、そして彼自身の自殺をきっかけとして、ジュードとスーの魂は、互いに全く逆の方向を辿り始める。幼い少年が、5章から6章にかけた僅か一章余りのスペースの中で担わされる役割は、余りにも大きい。それ故、彼をこの小説の流れを壊す不自然な人物だと批評する向きも多い[4]。作者ハーディの代弁者(mouthpiece)に過ぎぬという声もある[5]。又、その死に Christの十字架の死を連想させようとする見方もある[6]。彼の登場から退場までの物語の急速な展開から、彼を話を終結させる為の deus ex machina の役を果たすもの、と見られなくもないであろう。だが、小説家をColeridge の Ancient Mariner に例え、その役目は 'something more unusual to relate than the ordinary experience of every average man and woman'[7] を語るべき、とみなしたハーディにリアリズム一辺倒を求めるのは妥当ではないし、又、この少年に、Christや deus ex machina の果たす「救い」の役割を期待することはできない。彼がもたらすのは、寧ろ終末思想と、破滅のみである。

少年の死んだ後の、語り手の言葉、'The boy's face expressed the whole

tale of their situation. . . He was their nodal point, their focus, their expression in a single term.' (266) は、幼い少年が、この物語の要(かなめ)的存在であることを、いみじくも認めている。これまで、ハーディのキャラクターの失敗作として光の当てられることの少なかったこの少年をきっかけとしてこの章では時間性の面から以下作品の解釈を試みる。尚、この小論では、Little Father Timeの正体を一つのものとして読むことを意図してはいない。いくつもの性質の複合体がひとつのキャラクターを生むからである。

彼に幾つかの方向から光を当てる場合、主に次の四つの面が挙げられると思う。1)「時の化身」あるいは「時の使者」 2)裁きの子 3)暗い未来の子 4)Judeの分身(double)。以下、順にその理由とその役がもたらす効果とを検討してみる。

1) 「時の化身」・「時の使者」として

この小説に、初めてLittle Father Timeが登場したとき彼は次のように描かれている。

> He was Age masquerading as Juvenility, and doing it so badly that his real self showed through crevices. A ground swelled from ancient years of night seemed now and then to lift the child in this his morning-life, when his face took a back view over some great Atlantic of Time, and appeared not to care about what it saw. (218)

> He then seemed to be doubly awake, like an enslaved and dwarfed Divinity, sitting passive and regarding his companion as if he saw their whole rounded lives rather than their immediate figures. (219)

アラベラ (Arabella) によって、オーストラリアからジュードのもとに送ら

れてきた、この少年は、子供に仮装した「老人」である。しかも、「囚われの身の小さな神」のようにして、同じ汽車の乗客たちの表面にみえる姿というより、彼らの生涯全体を見渡しているかのような少年は、正に、彼の呼び名の示す、時の化身、時の翁（Father Time）そのものである。加えて、Jude の家まで「一定した機械的なのろのろ歩き」で歩くその姿や、波か、微風か、あるいは雲の動きにたとえられ、指示されたとおり正確に進む、(219—220) —という動作の描写に至っては、彼自身が、太古から流れる時の流れそのもの、とでもいった感じを受ける。つまり、我々は、「時」そのものを空間化した人物として、Little Father Timeを読むことができる。

"Father Time" とは、ギリシャ、ローマ時代から知られる「時」を擬人化したイコンである[8]。その外見は多くの場合、秤と鎌を持つ老人の姿で知られ、その性質としては Destroyer, Saturn, Chronos, Revealer, Opportunity, Cosmic Power の要素を持つと言われる。確かに、ジュードやスーに破滅、死をもたらす彼は、Destroyer, Saturn, そして、自分の子供（未来）を貪り食らうChronos の役を果たしているといえる。又、Revealer の性質を持ち合わせていることは、彼が口を開くとき、しばしば彼は人影に隠れていて、その存在を忘れられていることが多く、彼の声だけが、まるで真実の啓示でもあるかのように不気味な重みをもって響きわたる、という点から推測できる。少年が、フォーレイ家の伝説—フォーレイ家の者が結婚すると必ず不幸が起こる—を聴いた後、'If I was you, mother, I wouldn't marry father!' (223) とスーに向かって言うとき、彼はこの先起こる悲劇を既に見透していると言えるし、ジュードが苦い経験によって何年もかかって知るクライストミンスターの偽りを、一瞬にして見破り、ジュードが憧れ続けてきた学寮を見て 'I don't like Christminster!' 'Are the great old houses gaols?' (260) と叫ぶ少年は、隠された真実の Revealer としての要素も備えているのである。さらに又、彼の登場によって、そして彼の死によって作品に大きな転機をもたらすこの少年は、「時の化身」として、あたかも Immanent Will, Cosmic power の如くジュードやスーの時間を操り、支配している。以上の点から、彼が「時の化身」Father Time としての機能を持つことを検討してきた。

しかし、この小説で見逃してはならぬのは、彼もまた犠牲者である、とい

うことであろう。彼もまた、歴史という大きな「時」の流れの中で死んでゆくのである。「時の化身」の死…とは何を意味するのか。「時の化身」である彼の死は、「時」の停止を意味しているとは思えない。彼の死後も、何事も無かったかのように、「時」は刻まれ、流れ続ける。結局、彼は「時の使い」として人の世に送られ、「時」になりかわってその任務を終えると命を奪われ人間に戻る。故に、彼は *Little* Father Timeだったのだ。彼が果たした役割は「時の化身」、「時の使者」としての機能に止まらない。寧ろ、Little Father Time という名の少年が、その奥に持つ性質の中に、この作品を貫くトーンを見ることができると思われる。そうしたものを以下、読み取っていきたい。

2) 正義の子・裁きの子として

スーは、二人の幼子を殺された後、それが、ジュードとの奔放な愛に対する正義の裁き、自分の罪の浄化への第一歩だとして、苦悶のうちにもその死を受け入れようとする。

> 'My children — are dead— and it is right that they should be! I am glad — almost! They were sin begotten. They were sacrificed to teach me how to Live! their death was the first stage of my purification —' (228)

しかし、正式な結婚制度のもとに生まれたLittle Father Timeが、奔放な愛のもとに生まれた子供たちを殺すことで、正義が邪を裁いたのであるとするこのスーの言葉を、直ちに鵜呑みにすることはできない。彼を「裁きの子」であると認めることは、当時の宗教儀式としての結婚という形式を踏むことこそが正義であると認めた前提にたって作品を解釈することになるからである。そうした解釈は、この小説の他の部分に示されるモラリティにすら添わない。そのことは、例えば、キリスト教を素朴に受け入れているエドリン(Edolin)寡婦の言葉、即ち、スーが本心を押し殺して、最初にキリスト教会の下で結ばれたフィロットソン (Philotson) のもとへ戻ろうと、ジュードの為に買っ

た美しい寝着を引き裂こうとするとき叫んだ言葉、— 'Upon my life I don't call that religion!' (289) にも明らかである。

ハーディは、人間の感情を無視した当時の形式至上主義のキリスト教の結婚観には反対の意を示しているし、純粋にキリスト教を信仰しているエドリン寡婦にすら、上記のような台詞を言わせた点を考え合わせてみても、短絡的に少年を 'Child of Justice' と読むことはできない。が、「時」の視点からあえて言うならば、Little Father Time を、ジュードやスーがいた「その時代（現在）の基準として裁く者」と読むことは可能である。少年は、ジュードやスーが抗い続けた、「時代」という「時」でもある。彼の存在は、こうしてこの作品における「時」の意識をますます強めるのである。

3）「暗い未来の子」として

Little Father Timeと二人の幼子たちが、無惨な屍となっている恐ろしい光景、そして、'Done because we are too menny.' の書き置きを目の当たりにして、自分を責め、狂わんばかりに激しく苦悶するスーに向かって、ジュードは次のように言って聞かせる。

> 'It was in his nature to do it. The doctor says there are such boys springing up amongst us — boys of a sort unknown in the last generation — the outcome of new views of life. They seem to see all its terrors before they are old enough to have staying power to resist them. He says it is the beginning of the coming universal wish not to live.' (266)

「あの様な子たちが、今の時代に現れてきている。生きていたくないという一般願望の始まりと言うことだ」というこの言葉の中に、「世紀末」の思想を強く読み取ることができる。しかも、そこに見る「世紀末」、とは決定的な断絶感、「終末」を思わせるものでもある。

この場面は、医者の言葉を間接的にジュードが伝えるところであるが、「外」

の世界の人物の客観的な言葉を聞くことができるという意味で、物語という虚構の世界で、現実の（少なくとも、現実に近い）世界が顔を出す、数少ない場面と言える。そこでは正に、19世紀末の産業文明、宗教的核心を失った世紀末的文明が産み落とした、時代の落し子Little Father Timeの姿を、年代記作者が描く「社会時間」、「歴史時間」の中で理解することができる。ハーディは、自分のことを改善主義者（meliorist）と称し[9]、来るべき20世紀に希望は失っていないものの、その時代を 'Ache of Modernism'[10]に冒されているのだという。そうした考えは、例えば1889年に記された次のハーディの手記にも表れており、彼の未来像が薄暗いものであることは否めない。

> "April 7. A woeful fact — that the human race is too extremely developed for its corporeal conditions, the nerves being envolved to an activity abnormal in such an environment. It may be questioned if Nature, or what we call Nature, so far back as when she crossed the line from invertebrates to vertebrates, did not exceed her mission. This planet does not supply the materials for happiness to higher existences. Other planets may, though one can hardly see how."[11]

勿論、こうしたハーディの未来像を、そのままこの小説の「未来」に当てはめるつもりはない。が、救いの見えない暗さと断絶感が底辺に共通してあることは留意しておくべきことであろう。

我々はここで最後の場面、アラベラの最後の台詞を思い出してもよい。「スーは、息絶えるまで決して救いをみつけられないだろう」('She's never found peace since she left his arms, and never will again till she's as he is now!' (324)) という、呪いにも似たあの言葉である。悲劇のクライマックスの後に訪れる日常性の回復、安定はなく、救いのない暗黒に果てしなく通じるこの小説の閉じ方に、「終末」思想を否定することはできない。そして改めて先に挙げたジュードによる Litte Father Time のコメントを検討してみる時、この少年を、そのような終末観が凝縮された人物としてもみることができる。

4)　ジュードの分身（double）として

単に、Little Father Timeが、ジュードの血の繋がった子供であるという客観的事実の理由からのみでなく、我々は Little Father Time の中にジュードを重ね合わせて見ることができる。それは繰り返し出てくる 'I ought not to be born' という、自分の存在そのものに疑問を持ち、否定しようとする彼らの魂の根源的欲求に表れている。二人に共通するヨブ(Job)の言葉、即ち、自らが腹に宿った日、その日すらも抹殺したい欲求こそが、彼らの内に共通して奥深く流れる欲求である。

> 'Let the day perish wherein I was born, and the night in which it was said, there is a man child conceived.' (320)

ジュードが死の床で叫び続けたこの言葉に見られる、自分の存在の否定とは何か。それは即ち、自分の「過去」「現在」「未来」の否定、抹殺である。存在の否定、死をこのように「時」の視点から促えるならば、ジュードやスーの「時」を支配する Little Father Time の死は、彼らの魂の死を意味すると理解でき、分身（double）としての彼の死は、ジュードの死そのものを予感させることがわかる。「分身」は、もう片方に直接的、間接的に決定的な影響を与え、しばしば破滅へと導くことで知られているが、Little Father Time とジュードの関係も、その例に洩れない。

さらに、「時」の観点から分身 Little Father Timeを見るとき、彼が「暗い未来の子」であると同時に、ジュードの「過去」の不吉の如くジュードの「現在」に付きまとい、脅かしていることは興味深い。彼は「フォーレイ家の伝説」を実証する為に、「過去」の世界から回帰して送られてきたかのような役目も果たしている。ジュードと、その分身 Little Father Time の決定的な違いは、前者が「時」に挑み、戦うのに対し、後者は「時」の流れを、そのまま諦め、受け入れるところにある。少年は、単に、軟弱な未来の子である故に「時」を受け入れているのではなく、「時」が如何なるものか、遙か

遠い昔から熟知したうえで「時」に身を任せているかの様である。

以上、四つの面から Little Father Timeを検討してきた。先に述べたように、ここで彼の性質を一つに限定することはできず、上記の四つの性質が互いに絡み合い、影を落とし合って、ジュードとスー、そして、この物語に力を及ぼしていることがわかる。特に、自分の存在、自分の時間そのものを否定しようとする、少年の根源的欲求は、これから探ってゆくこの作品の性質がもつ時間性に大きく通じている。そして、少なくとも次のことは、上のいずれにも言えることであると思う。即ち、彼を歴史という大きな「時」の流れの中で見る場合、彼の登場は、着実に進み続けるクロノス的時間（直線的時間）に於けるカイロス的時間（回帰的時間、円環的時間）の出現を思わせるということである[12]。Little Father Time ― 彼は、「直線的時間」と「円環的時間」の交わり、「未来」へと進む時間に急転をもたらす「過去」の回帰、未来の無い「終末」を表しながらもなお、「回帰」をも表す少年と言える。つまり、彼は先に見てきたような、主人公ジュードやこの小説全体の性質がもつ「時間性」の凝縮であると同時に、この小説の構造が持つ「時間性」の凝縮でもあるのだ。悲劇の特徴であるカタストロフィへと向かう「直線的時間」、その「直線的時間」の中にある「回帰的時間」を彼が表しているのである。しかもそれは、最後にはもはや回帰することのない、終末へ向かう直線的時間性につながるものである。「直線的時間」と「円環的時間」の交わり、それによってさらにもたらされる悲劇、それを以下の章で読み取っていきたい。

II. Jude and Sue

> As for Sue and me when we were at our own best, long ago ― when our minds were clear, and our love of truth fearless ― the time was not ripe for us! Our ideas were fifty years too soon to be any good to us. And so the resistance they met with brought reaction in her, and recklessness and ruin on me!. . . (318)

「時」はまだ我々には熟していなかった。このジュードの言葉は、50年先の生き方を「現在」試みた結果、「時」に敗れ、全てを失った者の言葉、「未来」を先取りしようと、「時」に挑み、敗れた者の言葉としてのみ解釈するには信じ難い。確かに、作品の中には幾度となく 'We are a little beforehand,' (227)　'Perhaps the world is not illuminated enough such experiments as ours!' (279) と、自分たちを時代の不幸な先駆者 (pioneers) とみなす言葉が見られるのだが。

スーは、フィロットソンと結婚をし、結婚生活が何であるかを身を以て知った結果、夫婦生活を拒む。彼女は「多くの女性は服従するけれど、私は反抗するわ。この時代の野蛮な習慣や迷信を後世の人たちが顧みたとき一体何て言うかしら！」(171)「私達の一族の者は、男も女も強制されるものには何時でも反抗するのよ。」(215) と、彼女を押さえつける社会の枠に対して徹底的に抵抗しようとする。外から嵌められる枠、慣習とは、言わばその時代の「時」の歩幅と言える。キリスト教の結婚制度、契約という紙上の形式に囚われず、奔放な愛のままに自然な結婚を実践しようとしたスーは、貧しいが、学問をしたいと身分不相応な夢を抱きクライストミンスターを独学で目指したジュードとともに、当時の社会とは異なる歩幅で歩いていたことになる。

社会の古い因襲に反発し、乗り越えようとする彼らは、確かに「時」を先取りしていたようにも見える。現にクライストミンスターは時代とともに貧しい若者たちに門戸を開く方向に向かっている。だが、この作品のメインテーマ、即ち、'a deadly war waged between flesh and spirit' (5) を検当するとき、それには疑問が生じる。フィロットソンと別れた後、ジュードと同棲することになったスーは、シャストンの農業博覧会でピンクのバラに顔を埋めて、次のように言う。

> 'I feel that we have returned to Greek joyousness, and have blinded ourselves to sickness and sorrow, and have forgotten what twenty-five centuries have taught the race since their time, as one of your Christminster luminaries says. . . .' (235)

「ギリシャ的喜びに帰った」という表現から分かるように、キリスト教に基づく紙の上の結婚形式を拒むこと、本能の赴くままに愛しあうことが、即、時代の先を行くこととは結びついていない。

> '. . . I am not modern, either. I am more ancient than mediævalism, if you only knew.' (Sue; 108)

> 'Sue, you seem when you are like this to be one of the women of some grand old civilization, whom I used to read about in my bygone, wasted, classical days, rather than a denizen of a mere Christian country. . . .' (214)

この言葉は寧ろ、一瞬、彼らがいつか古代さえも超えて、原始生命に帰っていくかのような錯覚を興させる。「時」というフィルターを掛けて見る場合、彼らは「時」を逆行しているようにさえ見えるのである。だが、「逆行」という言葉もまた不適切であろう。ジュード達の目指す、形式に囚われない恋愛は人間中心主義のギリシャ的な性質を持つ一方で、宗教儀式が形骸化し、その重みを失い、個人が尊重される100年後の現代にも通じるものだからだ。しかし、人間の本質、人間性に忠実に生きることに、古い、新しいの形容詞を付けることはできない。人間にとって、本質的（essential）なこと、人間性に忠実なこととは、言わば「時」を超えたところにあるものだからだ。つまり、彼らは、時代の枠に囚われず、「時」を超えようとしていたのだ。ジュードから「文明の産物だ（a creature of civilization）」と詰られたのに対し、「私は文明の否定なのよ。(I am a sort of negation of it!)」(117) と、スーが反発して言う時、その言葉は彼女の行動とは矛盾し、アイロニカルに聞こえるにせよ、そこで意味されているものは、時間の連続の中で積み上げられた文明の否定、「時」の超越を意味するようにもみえる。

「時」を超えようと試みて、無残な失敗に終わったのは何故か。彼らの要（かなめ）（nodal point）であり、彼らの「時」を支配していた Little Father Time の自殺が二人の「時」をも止めてしまったのだとメタフォリカルな理解もで

きるが、具体的にジュードとスーが表面的、そして内面的に持つ「時間」を探っていくことで、彼らが「時」に虚しく敗れざるを得なかった原因をみていきたい。

クライストミンスターで、ジュードとスーが初めて出会った頃、スーは教会の金属細工師、ジュードは石工を生業にしていた。仕事とは、彼らが社会に接する言わば「表」の顔である。国教会関係の仕事はスーの本心に添うものではないが、少なくとも表面的には彼女は、社会、外の世界と「時」の歩調を合わせていたと言える。また、ジュードの石工という仕事は本来、石という非生命物質に形を与え、命を吹き込む創造的な職業のはずであるが、クライストミンスターにおけるそれは、「せいぜい模写と修繕と模倣しかない」(69) 保守的なものに過ぎない。しかも、ジュードはそれを仮の職としか思っていない。彼も又、表面的には（否、クライストミンスターに来た頃は心底からかもしれないが）中世主義に満ちた外の世界と歩幅を同じにしていると、解釈してよいだろう。

ところで、クライストミンスターの時間については、後述するように、この街に二種類の「時間」が存在することを指摘しておきたい。即ち、クライストミンスター学寮を中心とする中世精神に満ちた「澱んだ時間」と、街の労働者たちの生活や酒場の中に、進歩という形で侵入してくる「進む時間」である。が、たとえこの街にこうした異なる時間が流れているとしても、彼らがその街で生業をたてて生活している限り、彼らが生活を送るうえで表面的に見ることのできる彼らのもっている「外」の時間は、クライストミンスターの「時」の振幅に合っていたと言える。

彼らの「内」に流れる時間についてはどうであろう。お互いを自分の片割れ、分身 (counter part) と呼びあう従兄弟同士のジュードとスーには、「フォーレイ家の伝説」という「過去」が不気味な黒い影のように付いてまわる。フォーレイ家の者たちは結婚すると不幸になる、故に血の繋がった彼らの結婚はその悲劇を二倍にするものになろうという予感。ここでは「過去」が「現在」に力を及ぼし、「現在」おこる出来事の原因 (First Cause) になろうとしていることがわかる。しかも、この「過去」は彼らの「内」なるものに大きく影響を与える。この関係は、ハーディの他の作品、特に *Tess of the d'*

Urbervilles[13]にも明らかである。有史以来、刻まれ続ける「直線的時間」、「クロノス的時間」に対して、「過去」の「現在」への介入は、ある瞬間、瞬間で過去が、現在に触れる「円環的時間」、「カイロス的時間」の存在を思い起こさせる。直線的時間と円環的時間が交わるとき、物語には、しばしば大きな転換が引き起こされる。しかもそれは単なる方向転換に止まらず、円環的時間によって、以前の小さな出来事が、後で新しい意味を持って回帰してくるのである[14]。特にハーディの小説に於けるそれは、往々にして、不幸なものである。

ジュードとスーの「外」の時間は、一見、社会の時間と上手く嚙み合っているかに見える。しかし、彼らを、真の意味で彼らとして成り立たせる(identifyする)「内」なるものは、例えばジュードの場合「大人になんかなりたくない」「生まれなければよかったのに」という、「時間」の停止、抑圧、抹殺を望む根源的欲求のトーンである。クライストミンスターで学問をする為、自分に誠実な愛を実現する為、「過去」を振り返らず、次々と新しい街に移っていこうとする彼の progressive な表面的行動とは裏腹に、その根源的欲求の部分には progressive なものはない。寧ろ、彼の「内」にある「時間」は retrogressive なもの、即ち、「過去へ向かう時間」である。

一方、スーも、きらめく知性を数々の本から身につけ、進歩的で自由な思想の持ち主にみえるが、思考と行為が結びつかないケースが多い。世間体とジュードへの嫉妬からフィロットソンと結婚した後、ジュードから「君は自由な意見を持っているように見せかけて、どんな女にも負けないくらい社会の慣習の虜になっている。」(192) と言われ、'Not mentally. But I haven't the courage of my views, as I said before.' (192) と答える。精神的には自由でも、それを行動に移す勇気がない、信じてもいない因襲に畏怖、恐怖を感じるというのである。(260) そのようなスーの論理は、語り手の次の描写に明らかである。

> Sue's logic was extraordinarily compounded, and seemed to maintain that before a thing was done it might be right to do, but that being done it became wrong ; or, in other words, that

things which were right in theory were wrong in practice. (173—174)

では、「行動」は縛られる、と言うスーの「精神」、「内」なるものは本当に自由なのか。年代記作者（クロニクラー）である語り手は、その内側にまで踏み込んで描写することは限られているので、読者は表面的な行動からしか判断できない。しかし、'Jude, before I married him I had never thought out fully what marriage meant, even though I knew. . . .' (171) という彼女の言葉には、性の秘密を明かされなかった、もしくは、そういった問題を避けて通ってきた、ヴィクトリア朝の虚飾に満ちた倫理規範第一の社会に生きる若い女性の特色が、はっきりと表れている。又、そのことは「手紙」という間接的手段や、窓の手前と向こう側といった具合に、距離ができて初めて安心し、自分のジュードに対する気持ちに素直になれるという[15]、保守的な彼女の行為にも明らかである。

スーは、因襲に必死に反抗しているように見え、彼女の「内」なるものは、実際は憎むべき因襲に一番縛られている。そして、その原因を考えるとき我々は、彼女の行動基盤が、これまでいつも本、文字 (letter) に頼っていたことに思い当たる。J.S.ミル (J.S. Mill) やフンボルト (Humboldt)、ランプリエール (Lempriere)、カトルス (Catullus)、ルキアノス (Lucian)、ボッカチオ (Boccaccio)、聖書、その他数知れない本が彼女の知性の源であり、行動原理に大きな影響を与えている。が、所詮それらは文字から得たものに過ぎない。彼女がいくら頭にある理想を述べても、行動に移す段になると、彼女の言葉と行動は、ばらばらに分裂を起こし自己矛盾に陥るのだ。この小説のエピグラフ、「儀文は殺す」('The letter killeth') が意味するものは、正しくこの事だったといえる。故に、子供たちが殺された後、彼女が走るキリスト教は、本来の宗教とはかけ離れており、彼女はまるでパリサイ人のように、「文字の上だけの」宗教に、自分を無にして従うのである。

このようなスーが、「内」なる部分で黴臭い因襲に囚われているのも無理はない。文字になったものとは、即ち、既に「過去」のものであるからだ。経験をともなわない「過去」の脱け殻への固執— これが彼女の「内」なるもの

の実態である。Little Father Timeと、幼い子供たちの酷い死の後、それまで押し殺してきた彼女の内に潜在する「過去へ向かう時間」が堰を切ったように溢れ出す。その結果、「時」を超えたいという願望と、内面に秘む「過去へ向かう時間」の狭間で自己分裂をおこす彼女は、「現在」を生きられなくなる。

「時」に挑み、超えようとしたジュードとスーは結局「未来」へ向かって着実に刻まれる「時」の流れ、物理的にプラスの方向に進む「時間」の中で、自分たちの内なる「過去へ向かう時間」、言わば「マイナスの時間」に引き裂かれ、「時」の狭間に陥ることになる。幼い子たちを失って、'I am a pitiable creature, . . . good neither for earth nor heaven any more!' (268) と叫ぶスー、そして、「死んだら、自分の魂は、亡霊たちの間を彷徨うんだ」と語るジュード。

> 'As Antigone said, I am neither a dweller among men nor ghosts. But Arabella, when I am dead, you'll see my spirit flitting up and down among these!' (312)

彼らは、もはや、プラス方向へ進む通常の時間の中では生きてゆけない。生者の生きる地上、死者が住むという天上が持つ「時間」を彼らは生きてゆけないのだ。二人は、永遠に脱けることのできない「時」の裂け目に落ち、そこに救いが訪れることはない。ジュードとスーに潜在する「過去へ向かう時間」と、彼らが生きていく外なる世界に着々と流れつづける「未来へ向かう時間」とのずれ、歪み、捩じれ・・・時代を先取りして、一瞬「時」を超えたかに見えた彼らは、自分たちの持つ「時」の矛盾、混沌に呑み込まれていくのである。

III. Christminster, Bell

*Jude the Obscure*は、その舞台を次々と変える、空間移動の多い作品である。その空間が作品の中で大きな意味をもつことは、舞台の名が章ごとのタ

イトルとなっていることからも窺える。(I. Marygreen, II. Christminster, III. Melchester, IV. Shaston, V. Aldbrickham and Elsewhere, VI. Christminster Again) そして、重要なことは、空間移動が「過去」「現在」「未来」へとうつろう「時間」の動きと重なることである。

*Pilgrim's Progress*さながら、空間の移動とともにその魂を成長させていくジュードの物語に流れる「時」は、11歳の少年ジュードから31歳の死に至るまで、一直線に流れつづける。新たな目的を持つ度に「過去」を捨て、決して振り返るまいと新しい土地に移るジュードの空間の動きは「直線的時間」と通じ合う。が、その中で例外となる空間が、彼の出発点であったメアリィグリーンと、終着点のクライストミンスターである。ジュードは精神の成長の過程で、転機となる時をメアリィグリーンで過ごしたり、帰省したりする。様々な土地を遍歴した後、ジュードが最終的に戻る場所はクライストミンスターである。「回帰」—は、ハーディ小説を読む上での一つの鍵となる問題だが[16]、この小論では、「時間」の視点から「回帰」の問題も考察していく。「直線的時間」と回帰する「円環的時間」との交わりが如何なる結果をもたらすか、前の章で少し触れたが、この章では、空間の持つ「時」の特質を踏まえながら検討してみる。

クライストミンスターは「過去」と「現在」とが、奇妙に交錯した不思議な空間である。「過去」が力をこめて名乗りをあげる街、中世的精神に取り憑かれたこの街では、あたかも「時」は澱み、止まっているかのようである。初めてジュードがこの街にたどり着いたとき、彼が目にするのは通りを徘徊する過去の亡霊 (spectre, phamtom) たちであり、自らもいつの間にか肉を失っていることに気づく。彷徨い歩く亡霊たちは、通常時間(ordinary time)の世界では生きることのできない者たちである。死者の、そして生者の世界の「時間」には生きられず「時」の狭間に陥っているのである。クライストミンスターは、そういった過去の亡霊たちが出現し、生者と出会う「過去」と「現在」との間に境界のないタイムトンネルのような空間といえる。一見そこに流れる時間は他の空間とは決して分かち合うことのない「閉ざされた時間」のようにみえるのだが、我々は、この街にも生活があり、進歩と言う名で侵入してくる年代記作者の記すべき「歴史的時間」「生活時間」、即ち、

IIで記した「進む時間」があることを忘れてはならない。クライストミンスターは、「閉ざされた時間（回帰する時間）」と「生活時間（直線的時間）」のふたつの時間をもつ空間なのである。

この二種類の時間については、具体的にはクライストミンスターに於ける知性が「古い革袋に入れた新しいワイン」のようだ（120）というスーの言葉に表れるように、そこでは創造的であるはずの石工の仕事は修理、模倣、保存にとどまり、新しい時代を担う若い学生たちが学ぶのは中世的精神であるという閉ざされた性質を持つ一方で、そこに働く労働者や酒場の世界では、刻々と「時」が進み、変化、進歩をもたらしていることからも窺える。

そのようなクライストミンスターの「時」を象徴するものの一つに、街の中央にある「鐘」を挙げることができる。少年ジュードが初めてその鐘の音を耳にするのは、その音が聴こえるはずもない遙か遠くメアリィグリーンにいた時である。

> Suddenly there came along this wind, something towards him — a message from the place — from some soul residing there, it seemed. Surely it was the sound of bells, the voice of the city, faint and musical, calling to him, 'We are happy here!'
>
> He had become entirely lost to his bodily situation during this mental leap, ... (21)

少年ジュードとクライストミンスターを初めて結びつけたこの鐘は、彼がこの街に入ってからも彼の知らないうちにジュードとスーを結びつける役割を果たしているが、読者が興味を覚えるのは、ジュードの鐘の音に対する反応であろう。

遍歴の後、再びクライストミンスターに戻ってきた時、必死の思いで下宿を探しているにもかかわらず、ジュードが鐘の音を聴いて大家に見せる反応は次のとおりである。前の例と合わせて注目してみたい。

> 'Ah — listen!' said Jude suddenly, instead of addressing her.

'What?'

'Why the bells — what church can that be? The tones are familiar.' Another peal of bells had begun to sound out at some distance off.

'I don't know!' said the landlady tartly. 'Did you knock to ask that?'

'No, for lodgings,' said Jude, coming to himself. (260)

ジュードは鐘の音を聴いている間、ある種のエクスタシーに陥って、彼自身の肉体の存在(bodily-self)を忘れているかのようである。鐘の響きの持つ何かと、ジュードの内に秘められた何かが共鳴しあい、呼び覚まし合っているかのようである。その「何か」とは何か。それこそがクライストミンスターをクライストミンスターとするもの、ジュードをジュードたらしめるものの一つである。

鐘の音—それは本来、天界の摂理を告げるものであったが、次第に日常の生活時間を告げるものへとその役目を変えていった[17]。以来、それは「現在」の時、今、今、今、の瞬間を打ち鳴らすことで、「現在」と「過去」との決定的な断絶を示してきた。しかし、この作品における鐘の音は、寧ろその逆の要素を持つように思う。鐘の音の拡がりは、「時」が生まれたその瞬間から営々と脈打ち続ける「時」の連なり、「過去」「現在」「未来」にけじめの無い、たゆまず流れる時の連続を思い起こさせる。とりわけ「過去」の存在を思い起こさせる。何故なら、鐘は「現在」を打ち鳴らしているにも拘わらず、打ち鳴らされた瞬間には既に次の「現在」に追い立てられ、「現在」は次々と「過去」の刻印を押されていくからである。しかも、打ち鳴らされぬ「未来」は未だ無いのだ。

街の大鐘は、クライストミンスターそのものである。進み行く「直線的時間」を告げると同時に、「過去」を引きずり続ける「時間」をも持つ。そして、鐘の音の持つ「時間」がクライストミンスターそのものであるように、ジュードに潜在する「時間」も同じ要素を持っている。彼は「現在(いま)」を生きつつも、常にどこかでフォーレイ家の「過去」に憑かれている。学問、キリスト

教、人間性や愛に忠実な真の結婚生活…と少しずつ価値観、目的を変えて「未来」に向かう「時」の中で成長しながらも、フォーレイ家の「過去」はふっと蘇り「現在」を脅かすのである。しかも、ジュードの奥底に見え隠れしている「大人になんかなりたくない！」「生まれなければよかったのに」という根源的欲求はつまるところ「現在」から「未来」へ向かうプラスの時間を否定し「時」の流れに逆らう「マイナスの時間」である。

鐘の音と共鳴し合い、彼の肉なる部分を忘れさせ、エクスタシーへ誘ったのは、そうしたクライストミンスターの持つ「マイナス時間」の要素ではなかっただろうか。「プラスの時間」が支配している現実の中で、誕生、成長を否定し、停止、存在の否定、自らの「過去」「現在」「未来」の抹殺を希求するジュードは通常の「時」の中では生きられなかった。逆行する時間、過去へ向かう時間、「マイナス時間」の中で、人間は生きることはできない。彼は、「時」の狭間に落ちるより他になかったのだ。

これまでのことで明らかにされるのは、この作品の中で破滅に向かう者たちが、ある意味でみな Little Father Time によって示された「マイナスの時間」を持っていることである。ジュードの分身(double)である Little Father Time は「大人になりたくない」「生まれねばよかった」と、マイナスの時間を希求し、実行する。スーも子供たちを失ってからはぐるりと「過去」の闇へと向かう。そうした中で、「現在」を逞しく生きていけるのはアラベラである[18]。自らの手で、哀れみながら、いやいや豚を殺すジュードに向かって 'Poor folks must live.' (55) と言い、スーが感情をぶち壊しにすると恐れる、結婚という鉄の契約については「法はあたしたちを守ってくれるんだ」(213) と言い切るアラベラは「現在」を生きる為には因襲、迷信、「過去」、「現在」、全てを貪欲にその手段に変え、利用できる女である。'Well! Weak women must provide for a rainy day. And if my poor fellow upstairs do go off — as I suppose he will soon — it's well to keep chances open.' (319) と、ジュードの死を見越して、いんちき医者ヴィルバートの気を引く彼女は、「未来」をも打算して、まわりの男たちを利用できる女なのである。ジュードが死んでいることに気づいた後でさえ「現在」の楽しみを優先させ、亡骸を放って祝祭に出かける彼女こそはクライストミンスターの中にあっても「プラ

スの時間」を生きる者たちの代表と言える。

さて、クライストミンスターがジュードと同じく「マイナスの時間」の性質を持っていることが、明らかにされたところで、ジュードの空間移動という、小説の構造が持つ時間性、即ち、「回帰」の問題へ論点を移したい。何故、ジュードはクライストミンスターに帰ったのか、回帰したのか。クライストミンスターケーキに託してまでも、執着し続けたこの街は、依然彼にとっては「宇宙の中心」として彼の心を魅了していたのか。それとも、自分自身と同じ「時間」を持つこの街こそが、やはり彼の帰るべき場所、死ぬべき場所だとして、彼の内に流れる「マイナス時間」が彼を突き動かし、「時」の流れに逆行する行動に走らせたのだろうか。

クライストミンスターに着いて、ジュードは、宗教、教育、社会の在り方の矛盾を突く演説をぶつ。独白ともいえる彼の演説内容は、ハーディの思想の口移しである。しかし、彼はそうした演説が目的で戻ったのでもない。ジュードは、徹底的に自分の「過去」に、自分の中に秘む「マイナスの時間」に向き合わねばならなかったのである。彼は、「過去」を次々と捨てて空間を移動したことが、「未来」へ進むことを意味するだけでなく、それが「過去」からの「逃げ」(escape) であることを充分知っていたのだ。クライストミンスターに向き合うこと、それは、自分の中にある「マイナスの時間」と向き合うことでもある。

> 'I am in a chaos of principles — groping in the dark — acting by instinct and not after example. . . . I doubt if I have anything more for my present rule of life than following inclinations which do me and nobody else any harm, and actually give pleasure to those I love best.' (258)

ジュードは、このことをクライストミンスターで、確認せねばならなかったのである。「本能に従って行動すること、愛する者たちを喜ばせたいという気持ちに従って行動していくこと」、それこそが、あらゆるものが混沌の中にある今、不確かな「未来」に向かって進むべき唯一の道であるということを。

しかし、自分の「過去」と対決し、真の意味で「未来」に向かう生き方を見出したその矢先に、彼は全てを失う。愛する者を失った彼には、もはや「未来」に進むべき目的はない。「直線的時間」を生きる意味はもうない。まして、豊穣、枯渇、誕生、死、再生を永久に繰り返し続ける「円環的時間」は無意味となる。無意味の生に流れる「時間」とは決して進むことのない、そして永久に終わりのこない「澱みの時間」である。死んでも、生者と死者の間を彷徨うことになろうと言ったジュードは永遠に終わりのない「時間」を死んで尚、生き続けねばならないかのようである。が、少なくとも表面的には、ただ、「死」のみが、静かに彼の時間を止めてくれる。

結　び

ジュードが死んだ後、小説は突然「通常の時間」に戻る。アラベラの最後の呪いの言葉がある限り、この悲劇にはカタルシスによる浄化はない。作品を通じて問われた「存在」の問題に対する答えも見出せぬまま、読者はむきだしの現実の中に放り出される。「時」はジュードとスーの「時間」を支配していたかに見えたLittle Father Timeをさえ、その生け贄として呑み込み、尚、悠々と流れ続ける。わずか一章余りで姿を消す少年は、確かに、担わされた役割が大きすぎて、作品の流れの中で、一種不協和音的な存在であった。しかし、散漫になる恐れのあったこの小説の性質と構造がもつ時間性を凝縮したという点で、少年は作品の要となり、寧ろ、全体に不思議な緊張感と統一性さえもたらしている。そして何よりも、「過去」や「未来」からの断絶感を鮮烈に示し、足もとの見えない「現在」の不安を自ら浮き彫りにすることで、ハーディの哲学を具現化している。

我々は、これまで辿ってきたクライストミンスターが、ジュードがメアリィグリーンから初めて見た蜃気楼の様な影(mirage)に過ぎぬことに気づく。もはや、ジュードの出会った過去の亡霊を見ることはなく、その者たちの静寂の声を聞くこともない。そこにあるのは、ただ、若者たちの明るい'Hurrah!'の歓声、楽し気な鐘の音の拡がり…、即ち、進み続ける「時」を刻む鐘の音である。

この作品に、もはや「過去」の回帰はない。あとに取り残された救いのない暗さと、不透明な現実の強さの中に、終止符を打ちたくても止まることのできない「時間」のもどかしさをさえ感じる。「時」は流れ続ける。否、流れ続けねばならない。ジュードが、スーが、抗いつづけた「時」(outer-world)が無くなったならば、彼らの戦いの意味まで無くなってしまうのだから。どんなに激しく、人間が自己の「存在」について疑問を投げかけ、苦悩しようとも、厳として「時」は在るのだから。

註

1. テキストの引用は全て Thomas Hardy, A Norton Critical Edition *Jude the Obscure* (W.W. Norton & Company, 1978), を使用し、引用末尾の数字は頁数を示す。
2. Erwin Panofsky, *Studies in Iconology: Humanistic Themes in the Art of the Renaissance* (Icon Editions Harper & Row, 1972) 69-93.
3. A.Alvarez, "The Poetic Power of *Jude the Obscure*", A Norton Critical Edition *Jude the Obscure* 414-423. Walter Allen等、多くの同様の意見がある。
4. 同上
5. Walter Allen, *The English Novel* (Penguin Books,1954) 251.
6. F.B. Pinion, *Hardy the Writer: Surveys and Assessments* (Macmillan, 1990) 167.
7. Florence Emily Hardy, *The Later Years of Thomas Hardy* (Macmillan, 1930) 15-16. その他、Hardyの作品 *Return of the Native* のクリム (Clym) に描かれる「人生は耐え忍ぶべきだと諦めてかかる人生観」にも同様の思想が反映されていると言える。
8. Erwin Panofsky, 69-93.
9. F.B. Pinion, *A Hardy Companion* (Macmillan, 1978) 178-179.
   尚、ハーディのいう pessimist, optimist については次の書が興味深い。
   Vere H. Collins, *Talks with Thomas Hardy at Max Gate 1920-1922* (Duckworth, 1928) 62.
10. Thomas Hardy, *Tess of the d'Urbervilles* (Papermac, 1967) 147.
11. Florence Emily Hardy, *The Early Life of Thomas Hardy* (Macmillan, 1928) 285.
12. 直線的時間、円環的時間 (回帰的時間)、クロノス的時間、カイロス的時間、等に関しては、主に以下の書から示唆を得た。

Frank Kermode, *The Sense of an Ending: Studies in the theory of fiction* (Oxford Univ. Press, 1967)

Paul Ricoeur, *Temps et Récit* I, II, III 邦訳「時間と物語」I. 物語と時間性の循環、II. フィクション物語における時間の統合形象化、III. 物語られる時間、(久米博訳、新曜社、1988、89、90)

川端　柳太郎、「小説と時間」(朝日選書、1978)

渡辺　ドロテア、「時間と人間」(中央公論社、1979)

13. 百姓娘 Tess Durbeyfield の祖先が、貴族 d'Urbervilles家であった事から引き起こされるこの物語は、以後もずっと「過去」の影がテスに付き纏い、脅かすことを見てもジュードのケースと酷似している。
14. 川端　柳太郎、141.
15. 手紙という間接的手段、窓枠やドアの内と外といった、「距離」がスーの行動に影響を与えていることに付いては複数の批評家が指摘している。ここでは、主なものに止める。
    J.Hillis Miller, *Thomas Hardy: Distance and Desire* (The Belknap Press of Harvard Univ. Press, 1970) 158.
    Janet Burstein, "The Journey beyond Myth in *Jude the Obscure*",
    Modern Critical Interpretations Thomas Hardy's Jude the Obscure, Ed. Harold Bloom (Chelsea House Pub. 1987) 28.
16. Ruth Milberg-Kaye, *Thomas Hardy: Myth of Sexuality* (The John Jay Press, 1983) 54-71.
17. 川端　柳太郎、86.
18. Terry Eagleton, "The Limits of Art", Ed. Harold Bloom, 69.